

神奈川支部情報

第 24 号

発行日 2012 年 6 月 6 日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

ホームページ: <http://kanagawa.uketugu.org/>

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

3 月 10 日、横浜のかながわ県民センター行われている「市民フェア」に参加して、坂倉さんの証言集会を開催しました。今回も 60 名を超える参加者で盛大に開催することができました。じつは市民フェアへの参加は 2 年ぶりでした。昨年の 3・11 大震災の翌日(12 日)、翌々日(13 日)に計画していたのですが、あの震災で中止となってしまいました。その 12 日が坂倉さんの証言集会の予定でした。

今回、それからちょうど 1 年目に再開の運びとなり、坂倉さんは人工透析を受けている身体をおして、千葉の自宅から来て下さいました。4 年前と同じく、高柳美知子先生のサポートで貴重なお話を聞くことができました。その後、連休直前に中国の撫順戦犯管理所長一行の来日を迎える行事(5 月 3 日発行の神奈川支部情報特集号<戦犯管理所訪日団歓迎行事特集>を参照してください)があつて、坂倉さんの証言報告が遅くなったことをお詫びします。



今しか聞けない! (「市民活動フェア 2012」参加企画) 神奈川証言集会 報告集

私の戦争体験と、語り遺したいこと

証言者:坂倉 清さん(91 才:元中国帰還者連絡会会員)

助言者:高柳美知子さん(「人間と性」教育研究所所長)

日本は神の国だった!

高柳:「今しか聞けない」というタイトルがちょっと気に入りません。今日のタイトルのことです。先ほど主催者が、絵鳩さんが 99 歳だとおっしゃっているんですから 91

才の坂倉さんはまだまだです。「今しか」ではなくて来年も、その次も大丈夫ですよ。

坂倉:はい。大丈夫だと思いますよ。

高柳:もう今までも、何回か坂倉さんとコンビで話をしています。今日は久しぶりな

のですが、何の打ち合わせもしておりません。お手元にレジュメをお配りしておりますのでそれに沿いながら私がいろいろお伺いします。レジュメの上の方が自己紹介です。絵鳩さんは 99 歳、坂倉さんは 91 歳、私は若いんです。80 歳です。まだまだ若いなあ、と今思っているところです。生粋の戦争っ子として、私が生まれたのは 1931 年です。同世代の方もおられるようですが、日中戦争の前段の、満州事変が始まった年に私はこの世に誕生いたしました。もちろん軍国主義教育一辺倒の中で子ども時代を過ごしました。だから私は自分のことを「生粋の戦争っ子」というように自認をしています。

いかに生粋の戦争っ子であったかを証明するために、こんな話の機会があるごとにもって歩いているのが「国定教科書」です。国語の教科書ですけれども、私たち子どもたちはいろんな教科を通じて「この日本の国は神国である」、「世界でたった一つの神様の国です。だからあなたたちみんなは神様の子供なのだ」と言い含められておりました。

ところが、1945 年 8 月に戦争が終わりました。「敗戦」という形でけりがついたんですが、その後日本の子供たちはこうやって…（真黒に墨を塗った国定教科書を見せながら）あんなに「日本は神国だ」と教わった教科書の「何ページを開けなさい」と教師が言います。そうすると「そこを墨で消しなさい」と。ちょっとパラパラやってみます（教科書を高柳さんが何ページもめくる）。ほとんど墨で塗りつぶしたんです。教えてくれたはずの先生が「何ページを開けて、そこは全部塗りなさい」と言って塗らされたんです。私の記憶ではどの生徒、どの子どもたちも黙っていました。

今ならば手を挙げて「先生、質問！」とか言ってもいいと思うのですが、もう頭から「この国は神様の創られた国」と信じさせられていましたから、まして先生に何か意見を言うなどという体験は全くありません。言われるままにこうやって墨を塗ったんです。でも塗りながら私は「おかしいなあ」と思いました。

何が書いてあれば、墨を塗らないで済んだのだろうか。これが私の自我の目覚めと言ったらいいのでしょうか。14 歳でした。今でいうと中学の 2 年生です。それまで本当に身ぐるみ、洗いざらい「神様に慈しまれている子供の一人だよ」「天皇陛下は生きている神様なのだよ」と言われていることを、これっぽっちも疑いませんでした。

それでも、疑問は残りました。それは「生きている神様なら、ウンチはどんなのを出しているのだろう」ということです。金の塊を排出するのか、おしっこというのは銀粉がプウーっとほとぼしるのか、そう思うしか生き神様であることを自分の中に腑に落とさせることができなかったのです。14 歳になっても、です。教育は怖いなあと後になって思いました。

その後、私は学校の教師になりました。その時私自身が自分に言い聞かせたこと、誓ったことは「私のように教科書に墨を塗らせるような、そんな教師にはなるまい。そんな日本国にはさせまい」ということです。これが私の教師生活のスタートでした。たしかにその後、私たちの国は一度も戦争を起こしておりません。足元でいつ憲法が改正されてしまうのかわからないような状況がありますけれども、少なくとも戦後 66 年一度も銃をよその国に向けたりはしないできています。

三光作戦を知っていますか

今日はその 70 年前の戦争で皇軍兵士だったお一人の坂倉さんといろいろお話し合いができます。久しぶりです。何回かこういう席で二人で話したことはあります。二人で本を出しました。『あなたは三光作戦を知っていますか』という本です。中学生にも、小学生にもわかるというような、そんなつもりで書いたのです。



この本の前に、篠塚良雄さんという 731 部隊元少年隊員にいろいろ聞いて最初に出したのが、『日本にも戦争があった—731 部隊元少年隊員の告白』です。731 部隊というのは生体解剖をした部隊のことです。篠塚さん自身は直接手を下したわけではありません。「何やったのか」というと、生体解剖している医者にメスを渡すとか、補助的なことをやったという話です。翌年、篠塚さんから電話がありました。「高柳さん、あの本のようにもう一人話を聞いて本にまとめてくれないか」と頼まれました。その方が今日ご一緒している坂倉さんです。篠塚さんにいろいろお聞きしたように何回もお会いしました。実は坂倉さんも「自分のことを記録に残さずにはおるまいぞ!」という意気込みで書かれていたのでしょうね。原稿用紙でこんなに厚い原稿（指で厚みを示しながら）を書いていたのです。それを私にも送ってくださいました。

送られてきた原稿用紙には、もう一マスも空きがないのです。どのマスも「絶対埋めるぞ」というそういう気概だったのだと思いました。

でも、読むのが大変でした。「どれが段落?」という感じです。でも、びっしりとこんな厚いを見て、坂倉さんのそこに込めた熱い思いはわかりました。あらためていろいろとお話を伺いました。私が敗戦の 때가 14 歳でした。そして篠塚さんが少年隊員として駆り出されたのも 14 才ということもあり、何としても中学生に読んでもらえる、そういう本にしたかったんです。だからすごくわかりやすく書いています。

送られてきた坂倉さんの原稿用紙を見て、「これはちょっと手が出せないな」と思いました。その後また何回かお会いして聞きとりをしました。厚い原稿用紙を何度も読みました。そこにはいくつもいくつも「自分がどんなことをしたか」克明に記録されていました。その中からあの話、この話、これもいいかなと摘み出して書いたのが『あなたは三光作戦を知っていますか』という本です。

もうやめて!

その本には、坂倉さんの体験のほんの一部しか書いてないので、これだけ読むとたったこれだけのことか、と思ってしまいます。念を押しますが「実はもっともっと、いろんな悪いことをしたんですよね?」

坂倉: はい。

高柳: 私は読んでいてぞくぞくっとするから、これ以上読むのを止めたいと思った場面がいくつもありました。坂倉さんの原稿には直接にやったこと、中国の農村に押し入ってやったこと、拷問の仕方など、これからご自身で語られると思いますが、本

当に「もう止めて！」と言いたい、そんな場面をしっかりと書き残しておられます。この厚い原稿は今も家にあるのですか？

坂倉：あります。

“生粋の戦争っ子” だった

高柳：そうですね。その中のご自身で体験したことがらを全部ここでは聞きだす余裕がありませんので私の方で聞いていきます。お手元のレジュメをご覧ください。もう少し私のことをつけ足した方がいいですね。とにかくつま先から脳のとっぺんまで生粋の戦争っ子でした。

昭和20年、1945年の8月15日には玉音放送、天皇の直接の放送があるということが日本中に触れ回られました。そして私たち女学生もその日はラジオの前に座って「神様の声はどんな声だろう」と思って、緊張してその時を待ちました。当時の放送事情は、電波が悪くて、ガアガア、パイパイ、という音に乗っかって実に妙クリンな声が聞こえてきました。「えっ、これ神様の声？」。まさに珍なる声にしか聞こえませんでした。

戦後だいぶ経ってから、ガアガア、パイパイという電波を外して直接生の天皇の声だけを聞くと、普通の大人の男性の声でしたけれども、この当日は本当に珍なる声にしか聞き取れませんでした。おかげで私はその珍なる声を聞いたとたんに、今まで呪縛されていた「この国は神様の国なんだ」というぎっしり巻かれていた縄がパーッと切れました。

「神様ならこんな妙クリンな声を出すはずがない。『天皇は神様だ』という、あれは違っていったんだ」とあっけなく私の戦後の幕は上がりました。なかなか戦争中に受けた教育が抜けない、という話を聞きます

が、私は実にあの妙クリンな玉音放送を聞いたおかげで、簡単にすぐに消えたんです。そしてその後私が体験したのは、今お見せしたように、教えられた教師から墨を塗る指示を受けて、教科書に墨を塗ったことです。

私は、塗らせた教師が何の説明もなく、ただただ塗らせたということがどうしても腑に落ちませんでした。納得できません。そのことにずっとこだわってきました。そのことが、後に私が教師になったきっかけです。

戦犯管理所への関心

そして、その中で篠塚さんや坂倉さん、つまり元皇軍兵士たちが、かつて中国の戦犯管理所に入れられて、戦犯として暮らした証言を聞いたり、書いたものを読んだりする中で、私は中国に本当に大きな関心をもちました。特に、戦犯管理所での管理所職員の行為を指導した、周恩来さんという人に大変興味をもちました。そんなことがきっかけで私は篠塚さんや坂倉さんや、その仲間たちが始めた中帰連という会にも興味をもちました。

戦犯管理所の一つは撫順にありまして、そこに収容された方たちが「自分たちはなぜあんなことをしたのか」ということをくり返し、くり返し、反すうし、反すうしていく中で日本の戦争の過ちに自ら気がついていった、という記録やお話などを聞いてきました。そして、私もこの撫順の奇蹟を受け継ぐ会の会員として、今日までずっとやってきました。加害の事実を若い人たちに伝えていかなければいけない。記憶を記録にしていかなければいけないということで、私自身も自分の地域で、あるいは自分の所属している研究所（“人間と性”教育研究

所) 主催で坂倉さんや篠塚さんをお呼びして、証言を聞く集いを重ねてきました。でも、残念ながらその方たちも次々と姿を消されています。でも、「今しか聞けない」というこの文言にはこだわるんです。まだいっぱいできますよね。

坂倉：はい。

高柳：ご本人にとってみればせつないですよ。「今しか話せない」ということですから。でも客観的にいえば91歳の坂倉さんが、このあとこういう話をどれだけ続けていけるか。それは今しか聞けない。これは事実だろうと思います。そして今日、久々に二人で並びました。これからは坂倉さんにいろいろと伺っていきます。

まずは、ご本人の直接の声を聞いて下さい。坂倉さんの発言をお願いします。坂倉さんのお話の柱として私が勝手に考えたテーマですが、最初は「軍隊への憧れ」としました。憧れたんですか？

軍隊へのあこがれ

坂倉：そうですね。私がなぜ軍隊に憧れたのかと申しますと、私の育った所は周りに軍隊が多かったんです。例えば一番近くには佐倉の57連隊がありました。それからもっと近くには鉄道連隊、気球隊、歩兵学校など、やや離れた所には習志野の騎兵連隊とか、四街道には歩兵連隊とか、いろんな軍隊の屋敷の中に住んでいるようなものでした。だから子どもの時から、私たちは遊びも兵隊ごっこだった。兵隊のまねをして遊ぶのが当時の子供の日課みたいなものでした。学校から帰ってくると、まずかばんを放り投げてすぐに子どもたちが集まって兵隊ごっこをやりました。

そして実際の兵隊さんも、私の村落に來まして演習をやったり、飯ごう炊飯をやっ

たりしていました。それを私たちが見ていると、非常に動作が厳しい。しかし、ご飯を炊いたり、おかずなどはたいへんにおいしいものを作ったりしています。当時の私たちはたいへんに貧乏でした。世の中もそうでした。だから軍隊はいいなあ、と思いました。おいしいものを食べて、一生懸命演習をやっているから、こんなに立派な兵隊さんができると思いました。

私も大きくなったら兵隊さんになろうと考えていました。そのうちに世の中が底知れないほど不景気になっていきました。今も不景気ですがそんなものではありません。毎日のご飯も食べられるか食べられないかという、日本中が皆そうでした。私の家もよその家には負けないほどの貧乏でした。

そうしているうちに大人たちは顔を合わせると、「こんな貧乏では仕方がない。戦争でもやらないとどうにもならない」と真面目な顔で話していました。私たち子供は「戦争をやったら金持ちになるのか」と不思議でした。先ほど高柳さんが「私の生まれた時は満州事変だった」とおっしゃいましたが、それは私がちょうど小学校4年生のときでした。「いよいよ戦争が始まった」と思いました。

先生が「日本の軍隊は強いから支那、満州はすぐ取る」と言いました。当時は中国とは言わなかった。「支那」と言っていました。支那人のことは「ちゃんころ」です。

「満州にはたくさんの穀物がある。資源もたくさんある。戦争に勝てば何でも取ってこれるから日本の景気も良くなる」と、大人が真面目な顔で話していました。私はその言葉をまともに受けて「そうなのか。戦争はそのためにやるのか」と思っていました。

高柳さんも先ほどおっしゃったように天

皇は神様であり、この国は神の国である。だから負けたことはない。こんなに貧乏になったのだから戦争をやれば世の中は良くなるのだろうと。まともに思っていました。軍隊に憧れたということもそうだが、自分自身の貧乏を救うためには戦争をしなければならぬ、と誤ってしまいました。戦争をすることは非常にいいことだと考えたわけです。

私は身体が小さかったので、親も「お前みたいに身体が小さい者は兵隊にとられることはないから、一生懸命百姓をやれ」と言っていました。私の心の中では承知していませんでした。なんとか頑張れば兵隊になれると思っていました。兵隊検査の結果は、思いもよらず「甲種合格」でした。

高柳：甲種合格でとにかく喜んだ坂倉さんは「自分は高等小学校しか出ていないけれども、兵隊になって頑張れば位がどんどん上に上がるのではないかと」。そのことが坂倉さんの背中を押したんですね。

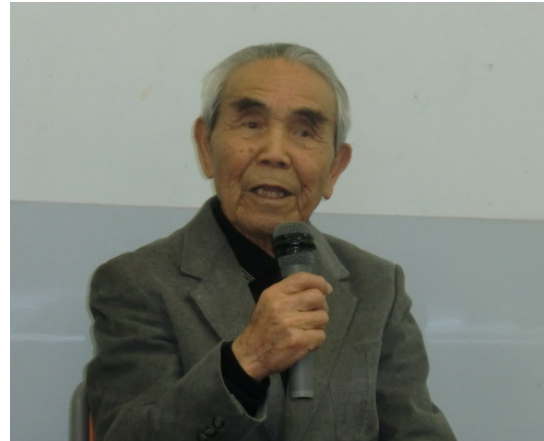
坂倉：はい、そうです。

しとつ 刺突訓練

高柳：そして本当に一生懸命に兵隊になる訓練をしました。そういう訓練の一つで、私が聞いてぞっとしたのは、刺突訓練です。「刺」というのは「刺す」です。「突」は突撃の「突」。新兵さんの訓練のために中国人捕虜や、あるいは村人を連れてきて縛りつけて、そこへ銃剣を構えて走って行くのです。そして刺すんです。よくそんなことができましたね？

坂倉：私は先ほど、「甲種合格にはなれると思っていませんでした」と言ったけれども、満州で戦争が始まって昭和12年に「支那事変」が始まりました。これが本当の戦争

の始まりだったわけです。そのときから徐々に軍人の資格や、規格が緩められました。それまでは162センチ位でないと甲種合格にはなれなかったのです。私は158センチしかなく、とても兵隊になれないと思っていました。



そのうちに、レベルが下がって、規定よりも背の低い人でも軍隊に入れるようになったのです。病気さえなければ軍隊に入れるようになったのです。私は身体は小さかったけれども病気はなかったのです。「甲種合格」という烙印は名誉の証書です。それを私はもらったわけです。入隊の命令が来て、軍隊に入って最初に行ったのが当時の山東省の泰安という町です。そこには泰山という大きな立派な山があるんです。泰山のふもとにある町が泰安市で、そこで教育を受けました。軍隊教育というのはとても普通の人には耐えられない厳しいものでした。昭和15年の12月ごろに入隊しました。6カ月が初年兵教育の期間ですが、教育が始まって約2ヶ月くらい経ったときに「今日刺突教育があるからお前たち出ろ」と言われました。銃を持って集合しました。

「(部隊の真ん中にある)弾薬庫の前に集まれ」と言われ、集まりました。そこに穴を掘りました。当時、私は八路軍がどんな軍隊かなど知らなかったのです。1人の若

い兵隊らしき男が縄でくくりつけられていました。「今からこの捕虜をお前たちは突くんだ」と教官が言い、次に班長が来て「一番最初に突きたい者は手を挙げろ！」と言ったら、みんな一斉に手を挙げました。班長が「お前、突け！」と言われた初年兵は身体は立派で、有望な初年兵だったのでしょ。私たちはそのときに見学に回りました。

なぜ私たちが見学に回ったかという、捕虜が一人しかいないのです。その一人を40人で突くんです。40人以上は仕方がないから、と私たち半分は見学に回ったのです。一番先に手を挙げた人は約10メートルくらい離れたところまでかけて行って突くんです。一回目にぐっと突いたら力があつたものですから、剣が抜けなくなりました。それで足で踏んでぐっと強く抜いたら剣が抜けた。1人突き終わって帰ったら、次から次へ「お前行って来い」と言われて、順番に銃剣で突き刺していく。2回、3回になると身体がめちゃめちゃになっていく。最後には身体の恰好がわからないくらい突いてしまったわけです。

さすがに突いた人はもちろんですが、見学に回った私たちも見ていて気分が悪くなつてしまいました。全部終わって自分の宿舎に帰りました。ですが、初年兵の私たち仲間の3分の1くらいの人が気持悪くてご飯が食べられないのです。本当は木の皮でも食べたいというくらいおなかを空かせた兵隊が、その日の夜ご飯は食べられなかったのです。

拷問作戦！？

高柳：最初はそのように心を痛めたんですが、段々に慣れちゃうんですよね。そういうことを積み重ねているうちに、本当に平

気になってしまうんです。私が話を聞いて、一番ショックだったのは、とにかく水を飲ませておなかをパンパンにしていたたり、乗っかったりして、水を吐き出させ、そしてまた水を飲ませる、ということを無理にくり返すことです。相手が同じ人間と思えばとてもできないような、まさに罪業の日々を重ねています。今どう思いますか？

坂倉：これは拷問作戦！と言ったのです。その時には、初年兵の教育が終わって、〔階級を表す襟の〕星は一つになっていたのです。これで一人前になったという証拠なのです。作戦に3回か4回行った後、私が2年兵になった時のことです。

初年兵のときもずいぶん罪業は多かったのですが、2年兵の時はもっと多かったのです。一個中隊約60名くらいが単独行動をとって、山東省の平原県に向かいました。列車に乗って天津の方へ向かって、その中間のところ平原県というところがありました。その駅に降りました。そこで、北京にあった日本のある重要な会社の社長夫人が八路軍に誘拐されたので、探さなくてはならないということになりました。一個中隊で拉致された婦人を探せという名目の命令です。

ある日、その日は春節の日です。日本というお正月です。その時に私たちは、夜移動して朝早く、目的の部落に着いたのです。着くと直ぐに、中隊長が通訳を呼んで「今から中隊長の私が質問をするから村の人を集めろ」と村の人を全部集めさせました。中隊長は私たちには、「一緒に行って『日本人のダイジンが立派な話をするのだ。聞きに来い』と言って村の人たちを集めてこい！」と指示しました。

こうして50数人の女、子供が集められました。中隊長は「今からお前たちに話を

する」と言いました。何を話したかといえ
ば「この村落に八路軍が来たことがあるだ
ろう。どこかに兵士を隠しているのではな
いか。知っている者はここで手を挙げて言
いなさい」と言いました。これが中隊長の
言う「立派な話」の内容です。

村落の人は誰も知りません。「そんなこと
ありません」という答えが返ってきました。
押し問答をしているうちに中隊長は「よろ
しい!」と言い、私たち兵隊を集めました。
私たちに「2人ないし3人が一組になって
この中からこの人は、と思う人を連れてき
て質問をしろ」と言いました。これは拷問
をしろということです。「拷問して吐かせろ」
ということです。

私たちも2年兵になったばかりで一番張
り切っていたときですから、仲間と一緒に
3人で35、6歳位の立派な男性に目を付
けました。その人を一軒の農家に引っ張っ
ていきました。そこで私たちは、その家の
門扉を外し、戸板を持ってきてその男を仰
向けに寝かせて縛りました。その男は「な
んで俺を縛るのか!」と怒りました。「まあ
いいからそこに寝てろ!」と言い、寝かせ
ていました。

さてどうするかと考えながら、同行の古
兵に「どうしますか?」と聞きました。す
ると「まず水だろうな」と言うので私は水
を汲みに行く、もうひとりはおぼろ布を探し
に行きました。私は桶に水を一杯汲んで来
て、もうひとりはおぼろきれをいっぱい持っ
てきました。そのおぼろ布を顔にかぶせて私
が土瓶を持って水を飲ませました。顔に布
を貼って身体は絶対動かせないようにして、
おぼろ布の上から水を注ぐのです。最初は水
を飲まないように拒否します。だがいつま
でも、息を止めたままではいられません。
2分か3分くらいずっと水を注いでいると

びくびくと動きます。いくら水を飲まない
ようにしようと思っても、これはたまった
ものではありません。どうしても苦しいか
ら呼吸をしてしまいます。そのために水が
入ってしまいます。それをどろどろどろど
ろ続けて10分くらい続けて、その途中で
ちょっと止めて聞くんです。「八路軍が来た
だろう!」「どこかで兵士を隠しているだろ
う!」とか何度聞いても同じで「知らない」
と言うのです。これを続けていると、遂に
はどうとうぐったりして飲まなくなってい
きます。

口から、血で濁った水が

見たらお腹が大きく膨れている。古兵が
「これじゃあ駄目だ。ちょっと待て!」お
腹に自分の足を乗せてぐっと踏んだん
です。そしたら飲んだ水をいっぺんにドボツと吐
いたんです。その中に血も混じっていたん
です。本当に苦しそうでした。お腹が大き
くなったら足で踏んで水を吐かせる。くり
返すうちに気を失ってしまいました。「こり
ゃー駄目だ!」と古兵が言った。私はその
ときに生意気に「いや。まだ手はある。酒
を飲ませてやろう。焼酎を飲ませてやれば
何とか生き返るだろう」と言って出て行き
ました。

当時春節だったのでお酒はどこの家でも
たくさんあったのです。それを集めて持っ
てきました。私は「いいか。ご馳走だろう」
と言いながら、50度くらいのマッチで火
をつけたらすぐ燃えるような酒を、ちびち
びちびちび鼻の中から入れると、みんな飲
んでしまった。これを何回か繰り返してい
るうちに、その人はとうとう何もわからな
くなってしまいました。本当に苦しうに
していました。1時間くらい経つと、とう
とうその人は我慢できなくて「言う、言う、

ある、ある」と言いました。これはしめた、
と思いました。

これがアルコールの力というものです。
しかし、縄をほどいて、その男を立たせて
も立てないんです。仕方なく私と初年兵が
二人で両肩を貸して「どこだ」と聞くと、
「あそこだ」とあごをしゃくる。その通り
に付いて行ったところ、民家の中に入って
しまいました。「こんなところにあるのか！」
と聞くと「そこにある」とまたあごで指す。
そこにオンドルがあったんです。そのオン
ドルのところに行って「そこにある」と言
ってばたっと倒れて、もうそれで終わりで
す。

高柳：今のお話だけでもまさに蛮行としか
言いようがないのですけれども、こういう
話が、私がお預かりした、坂倉さんが書か
れたぶ厚い原稿用紙の中にいくつもいくつ
も出てくるんです。本当に読むのに耐えら
れなかったのです。罪業とは本当にこうい
うことだなと思うんです。何でそんなこと
ができちゃったんですかね。

出世のためには

坂倉：それは、私たち初年兵、あるいは古
い兵隊でも軍隊に入ったらまず功績〔が第
一〕です。自分の成績を上げるためです。
その捕まえた者が本当に八路軍の兵士であ
ったとすれば、八路軍の情報が正確なもの
であると、その情報を元に次の作戦会議を
するわけです。そのために拷問でもなんでも
やるんですから。誰もが、競争なんです。
功績をあげる、出世するための競争なので
す。

高柳：そうすると坂倉一等兵はこういう功
績を残した、ということで評価されて位が
上がるわけですね。それで、功績を挙げて
何になったんですか。

坂倉：一等兵だったから次は上等兵。上等
兵から兵長になる。

高柳：最後は兵長？

坂倉：軍曹ですね。

高柳：同じ一緒に兵隊になった中ではやは
り群を抜いて・・・？

坂倉：まあ常にトップの方でした。

高柳：トップだったんですね。兵隊仲間で
はぐんぐん、ぐんぐん上に登っていったん
ですね。ということですが、罪業を重ねて
いるうちに敗戦になりました。日本が負け
たと聞いたとき何を思いました？

坂倉：私は軍隊が長かったんです。軍隊の
中では私のように、こんなに長い者はいま
せんよ。普通は1年半ないし2年です。そ
れが5年もいるといくら軍隊が好きでも
「早く帰りたい。嫌だ！」と思いますよ。
でも、戦況が悪くなって帰れなくなってし
まったんです。

敗戦 ー内心、喜んだー

高柳：負けると思いました？

坂倉：ある時、下士官だった時ですが、公
用で外出した時、知り合いの韓国人の兵隊
に会ったんです。お互いに顔を知っている
んです。「あなたなぜこんなところでふらふ
らしているの？」とその曹長は言うんです。

「日本は絶対負けているよ」と。昭和19
年の末の頃です。「戦争に負けているんだよ」
と言うから、私は面白くないから「なにっ！」
と反撃したのですが、「でも負けているんだ
から」と言う。隊に帰ってもそれからは寂
しくなってねえ。

高柳：それで「日本が負けた」という、私
が先ほど話した天皇陛下の玉音放送という
のは聞いたのですか？

坂倉：敗戦後、私たちが部隊を引き揚げ
るときは朝鮮で止まってしまったんです。船

がなく、日本へ渡れるかどうかわからない。ピョンヤンとソウルの間を行き来して貨物列車に乗って行ったんですが、とうとう行くところがなくて止まってしまった。そこで捕虜となった。その時に・・・。

高柳：天皇の詔勅を直接聞いた？ 何を言ってるかわからなかったでしょう？

坂倉：わからない。

高柳：でも負けたっていうことはわかったんですよね。

坂倉：そうですね。

高柳：それでそのとき、何を思いました？

坂倉：安心したんですね。

高柳：そうですか。皇軍兵士が・・・。

坂倉：負けた、というよりももう終わりだということなんです。これで戦争が終わった。これでやっと自分の思うことができるようになった、と。

天皇陛下バンザイ！？

高柳：じゃあ、天皇陛下のためにバンザイと言って死ぬことこそ本望だっていうのは嘘だったの・・・？

坂倉：嘘です。それは本当に嘘です。誰でも、たとえば自分が敵の弾を受けて今にも死にそうになっても「天皇陛下」なんて言わないですよ。

高柳：天皇陛下万歳と叫びましたの？

坂倉：言わない、言わない(くり返し強調)。

「おかあさーん」あるいはまた「兄弟の名前」とかそういう人のことを言いながら死んでいく人間が多かったです。それは私たちがその人たちから直に聞いたんですから、まちがいじゃないです。

高柳：じゃあ、内心ホッとしたわけですか、負けたことで。

坂倉：はい、そうです。これでやっと肩の荷が下りた。私は教育係で初年兵を引きつ

れていたし、当時責任感が強かったものですから。戦争に負けて、この32名の初年兵がどうなるのか、と思っていたので、戦争に負けて「もういいや、俺の任務は終わったのだ。やっと普通の人間に帰れるんだ」と内心喜んでいました。

高柳：でも、そういうことを同僚の兵士たちと本心では言い合えませんでした？

坂倉：いや。お互いに目と目で・・・絶対口には出さないですよ。ほっとした。だからもう何もかまうことはない。

シベリアへ抑留

高柳：それが本音ですよ。命拾いしたなあと。そしてその後、シベリアに抑留されるんですよ。もう時間も迫ってきたんですが、シベリアのお話を聞かせて下さい。

坂倉：私たちの部隊が二つに分けられました。半分は樺太の沿岸の方へ行きました。私たちの部隊は、ウラジオストックのちょっと北の方にある、ナホトカというところへ連れていかれました。ナホトカに上陸してそこで夜ご飯を炊いて食べた。当時、そこでは水がどこにもないんです。しょうがなく、海水でご飯炊いたら塩っ辛くてね。本当に困りました。その晩はそこには泊まらないで、ご飯を食べたらすぐに出発しました。月夜の晩で明るかったけれども、湿原地帯の暗いところをずーっと歩いて行っただけです。夜の11時ころ、「今夜はここで泊まる」と湿原地帯の中でみんなゴロ寝したんです。ややしばらく経って夜中にソ連の兵隊が来まして「強盗に来た」「武器を出せ」「マネー？を出せ」とそんなことを言っただけです。

高柳：あげちゃったわけですか？

坂倉：いやいや。私は下士官ですから、こいつら逆に脅かしてやればいいんだと。だ

から初年兵に小さな声で「いいか。黙って出すんじゃないぞ。もし盗られそうになったら大きな声を出せ」と言いました。そしたらいきなり私の頭のところにきて私の枕を蹴っ飛ばすんです。まだロシア語は全然わからなかったんですが、「時計あるか？時計出せ」という。「ない」と応える。そしたら殴るんで、「ふざけるな」と大きな声を出して「殴っただろ。みんな騒げ」と言ったら、みんな大きな声を出して「何しやがるんだ」と日本語でしゃべるんです。そしたらソ連の兵隊はわりと単純なものですから、怒られたらびっくりしちゃって来なくなっちゃうんです。

高柳：シベリア抑留生活は5年間もあったんですよ。一番思い出すことって何ですか。

とにかく寒い！！

坂倉：とにかく寒い。私たちが入ったのは10月の末ですからもう冬です。寒いこととお腹が空くのと、これが一番つらかったです。

高柳：労働もさせられたんじゃないですか。

坂倉：労働してもできない。始めのうちはやったんです。まだ元気があったから。10日経ち、一か月经つとますます寒くなって、もうとても外に立ってられない。だから仕事はできないのです。すると監督が来て、仕事をしないと監督自身のノルマが達成できない、だから「これだけやれ」と。これには「腹減っているからできないんだ」と応える。すると、兵隊が来て「やれ！」と命令する。「お腹が空くから仕事ができないんだ。お前にできるか。ちゃんともらっているんだろ。正規の既定の食料をもらっているはずだ」と反論した。

実際に、本当にもらっていないんじゃない。水っぽいお粥みたいなものばかり食べ

させられて、パンは一切れだった。わずかに一切れです。300グラムのパンでこんなきつい仕事出来るか！と反論した。それでも駄目だった。

高柳：私も結構シベリアの生活は聞きとったのですが、一口で言うと凍傷と栄養失調で病室はいつも満員という状態だったのですね。そして重労働。散々でしたね。

坂倉：あの辛さは言葉では表せません。

地獄と極楽の違い

高柳：その後、中国に引き渡されて、そして撫順の戦犯管理所に入れられたわけですが、ここでの生活とシベリアの抑留とはどう違いました？

坂倉：天と地の違いというか、地獄と極楽の違いですよ。

高柳：具体的に言うとうどうでしたか？

坂倉：私たちがソ連から〔中国に〕行ったのは7月の20日です。貨物列車に乗せられました。中に入れられて、外からきちっと鍵をかけられて、中はもう息もできないほど苦しい。そのひとつの貨車の中に3段ベッドを作ってあったんです。

一つのベッドに9名だから片方だけでも3×9で27名が寝たわけです。だから身体が横になったら身動きできない。もし自分がちょっと体を横に動かしたらその隣の人が入りこんでしまうから自分が浮き上がってしまう。そういうようなところで、しかも暑い。汗は流れる。上の人汗が下の方へ流れる。そのくらいの汗のかき方だったんです。

高柳：中国に連れて行かれて自分たちはどうなるのか、予測はしていましたか？

坂倉：それがですね、ソ連の貨車の苦しみから、今度は中国に引き渡されて乗った列車が非常に立派な客車で、しかも席に着く

とすぐに看護婦さんが「病気になった人はいませんか」と親切に回ってきたわけです。「これはありがたい」と思いながら、どこへ行くのだろうと思っていました。着いたのは中国の撫順戦犯管理所というところだったのです。入ったところ〔監房〕に張り紙があつて、「戦犯」という言葉があつたものだから、みんな怒っちゃったのです。「我々を戦犯とはなにごとだ」、「誰が戦犯だ」、「命令でやったことなんだ」、「戦犯とはとんでもないことだ」と。

中には学問のある偉い人もいたから、その人たちは国際法なども習った人がいたでしょう。「俺たちは戦犯ではない!」と、相当強く反抗しました。でも、どんなに反抗しても、中国の職員の人には知らん顔です。「まあ、まあ」「まあ、まあ」といった調子でした。

高柳：待遇はどうでしたか。そこで何を思いました？

坂倉：そうですね、撫順ではとにかく朝、昼、晩、ご飯は山ほどあつた。今まで、シベリアではお腹をすかせてペコペコだったのに、戦犯管理所では「食べなきゃ駄目だ。腹いっぱいになるまで食べろ」と。「足りなきゃ盛ってやるから」と盛ってくれた。食べられることは本当によかった。しかも3食白いご飯が出て、おかずもちゃんとついていたのです。

高柳：おかしいな、あんなひどい目に遭わせた中国の方から、こんなに待遇がいいのは「ひょっとして?」と思ったんじゃないですか。

坂倉：それはちょっとは思ったけど、だが中国は昔から儒教の国ですからね。そういうことはあまりないだろう、と思っていました。だがそのうち「私たちは何のためにここに連れてこられたんだろうか」、「戦犯

だというけれど本当に戦犯なのか」、「ひょっとしたらここでバツサリと首を切られちゃうんじゃないか」、「ドイツがやったようにガス室か何かに入れられて殺されるんじゃないか」とか、そういうことばかり考えるようになった時期もありました。

「社会発展史」の学習

高柳：私が坂倉さんのお話を聞いたりして感心したのは、この管理所ですごく勉強したことです。『社会発展史』を一生懸命読みましたよね。つまり高等小学校「しか」といった言葉をあえて使いたいのですが、出てない坂倉さんが『社会発展史』を読んで、世の中のことに目を開き、世界の動きを知ったことの喜びをいろいろ書かれていたんです。

坂倉：それはですね。「学習」と言ったんですが、中国の職員で呉浩然先生が『社会発展史』の担当だったんです。週に一回、ときには2週に一回必ず講話がある。その講話のテーマが『社会発展史』でした。その『社会発展史』は丁寧に話してくれて、小学校しか出ていない人でもわかる優しい言葉で、しかも奥行き深い内容でした。その講話に出ているうちに「ああ、こうだったのか。こうだったのか」とわかってきたのです。始めは原始共産時代ですか、やがて奴隷時代から封建時代、生産が高まってくると物を商品化する、と。

高柳：エンゲルスですね。

坂倉：その『社会発展史』をやっているときに、みんなで分担してノートをとったんです。

高柳：私が感心したのはせっせとノートをとったということです。

坂倉：今度はそのノートで勉強するわけです。部屋の人と討論もする。わからないこ

とはまたもって帰る。

高柳：「あの戦争、自分が巻き込まれた戦争、あれは何だったのか」ということを知りたかったのですよね。

坂倉：まだそこまで行っていないのです。先生が最後に「世の中が発展して、資本主義から帝国主義の段階に入って行き、発展し過ぎるとそのときに、よく戦争が起こるのだ。お互いに押し合う。そういう時代だった。私の話はこれで終わりだ。皆さんはこの帝国主義論を聞いて、自分と結合させて良く考えてみなさい」と終わったんです。私はこれに参ったんです。

肺腑を突き刺されて

帝国主義論と、私たちの軍隊のことを結合させて考えてみろ…誰に聞いてもすぐに即答はできなかったんですね。相当高水準の大学を出た人でも、すぐ返事はできなかった。そうしているうちに金源先生が、ある日「今日は全員、外へ出なさい」と言うのです。みんな「あっ」と思って庭へ出たんです。「今からお前たちの中から1人、自分の学習した意見を発表させてほしい、と申し出た人がいる。許可したから、みんなで聞きなさい」と言うことでした。それで表へ出て行くと、位の高い、軍服を着た偉い人たち〔＝中国の職員〕ばかりがずらっとそろっていたんです。そこに、宮崎 弘^{ひろむ}という元39師団の将校がみんなの前に出てきたのです。そこで、金源先生が言うには「宮崎弘が今から自分の経験した学習と経過によって、出た意見を述べたいと言う。それを許可する」と言うのです。私たちも、そこでどんなことを発表するのか、相当重大な意見を発表するのではないか、と思って待っていました。

宮崎弘はどんなことを発言したのかとい

うと「私は帝国主義論を読んで学習して、次のようなことを考えました。私は、元軍隊の陸軍大尉だった。中隊長であった」。当時彼らの所属する39師団というのは、江南地区ですから揚子江より南の方なんです。温かいところです。「ある農村地帯を掃討中に、私はそこで部下に命令して、農民6人を殺害しました。殺させました。私自身でも5人くらいの人首をはねました。そして民家を焼き払いました。このような重大な罪行を犯しました。だから、このような私を極刑に処して下さい！」と最後は絶叫しながら、周りにいた多くの職員に対して頭を下げました。

高柳：それがこの戦犯管理所の中では大きな転機だったんですね。

坂倉：そうです。

高柳：収容されていた者たちも、彼の告白を聞いて「自分もだ」とうなずいたんですね。

坂倉：それが本当にわかったんですね。

高柳：そして私が坂倉さんから聞きとったところによると、「この告白は、聞いている者たちの肺腑を突き刺しました。そうだ、同感だと、彼が話している最中に、あちこちから声が上がります。私も胸が押しつぶされそうでした。一緒に泣く者もいました」。

これが転機で管理所にいた人たちみんなの気持ちがつながっていったんですよね。中国の側から責められてそうなのではなくて「自分たちは何であんな蛮行をしたのか」ということを自分でつかめるようになっていったということですね。

薄皮を1枚ずつ剥がすように

坂倉：その後の告白運動というんですか、中国の方々から我々に対して「自分の罪行を告白しなさい」という指示があった。そ

のときに「あなた方は自分の罪行を隠したり、縮小したりしてはいけない。あるいはまた、これを誇大視してもいけない。大きくしても隠してもいけない。ありのままに、実際のことを、事実を話さない」と言われました。

高柳：時間が来てしまったんですが、自分で自分の罪状を書き出すというのはきつい作業ですね。

坂倉：そうですね。

高柳：だから私流の表現で言うと、自分の身体の中にある記憶を1枚1枚引きはがすという感じで、自分がやったことを書く。それを持っていくとまた「もう少し考えなさい」と戻される。そしてまた自分の記憶を1枚1枚引きはがすようにして…と。これが私の聞きとった感想なんです。そういう形で坂倉さんも告白書を出したんですよね。戦犯管理所に入れられている人みんながね。

坂倉：罪行を書くために手が震えるんです。手が震えて涙が出る。なんであんなことをしたのだろうと。

高柳：もう時間が過ぎてしまったのですが、最後にこのレジュメでは若い皆さんへの遺言、ここにいらっしゃるみなさんに何か言い伝えておきたいことをどうぞ。

不景気だ！と、騒いでいるときが

坂倉：ここに集まっている人はですね、戦争に反対していると思うんです。平和を望むのがみんなの気持ちだと思います。今は平和である。憲法9条があるから60何年外国と戦争していない。これは憲法9条のおかげだと皆さん言っています。私も同感です。ただ戦争というものは決して今日誰かが思い付いたから、今日戦争をするというわけにはいかない。戦争をするには、私

の経験から考えても、「不景気だ！」と騒いでいるときが危ない。本当に静かなようであつても、世の中は戦争の火の粉が上がったらもう引き戻せない。

火の粉というのはいろんなところにある。例えば、今の出版物の中にもあります。『正論』のような雑誌には目を覆いたくなります。ひっぱたいてやりたくなるような、そんな記事もたくさんある。私はそれをしまつてありますけれども。こういったものは戦争を始めなければならない、という状況を作っているわけです。それに注意して下さい。戦争の火の粉を消すんです。皆さんはひとつ私の経験をもとにして戦争の火の粉を消してください。

高柳：それが遺言ね。戦争の火の粉を一緒に消しましょうということですね。もっとも聞きたいところですが、これで終わりにします。